OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

大津歴博だより

2017
No.107

contents

P1~3・6 企画展 田上てぬぐい
P4 ミニ企画展 戦時中の町内会
P5 学芸員のノートから

企画展

田上てぬぐい ー暮らしと文化ー

平成29年7月22日(土)～8月27日(日)

田植えの衣装　左：昭和54年　右：昭和48年撮影

田植えの華は、五月女(さおとめ)とよばれる女性たちです。頭に田上てぬぐいを被り、腰にシロガスリの三巾前垂れ(みはばまえだ)を付けます。前垂れ紐はカラフルで巾も広く、まるで帯を締めているようです。華やかな襷(たすき)を掛け、腰にも前垂れをさばくための紐(ひも)を付けています。一方、男性は紺一色の仕事着でした。

大津市歴史博物館

田上てぬぐい ―暮らしと文化―

会期：7月22日（土）～ 8月27日（日）
【休館日：期間中の月曜日】

田上郷土史料館は、昭和 43 年（1968）、上田上牧町（かみたなかみまき）にその産声をあげます。きっかけは、二人の有志の熱い思いからでした。高度経済成長期、上田上地域でも家々の新築が進み、かつての民家や小屋が取り壊され、不用となった生活道具が次々と廃棄されます。昭和 41 年、大型ゴミとして廃棄されていた道具類の中に、二人の知らない道具があり、興味をそそられ、時代の変化の中で、郷土の文化を担っていた道具類が消えてゆくことに危機感を持ちます。そして二人は、これらを何とか後世に残せないかと活動を始めます。二人とは、真光寺（しんこうじ）の東郷征文氏と田村博氏（故人）の同級生コンビです。

二人は牧町で不用となった生活用具をせっせと集め、真光寺の太鼓楼に収蔵する活動を始めます。はじめは奇異に見ていた地域の人々も、二人の活動に共感し、旧牧町集会所を提供し、彼らの活動を応援しようと動きだします。昭和 42 年、地域の人々の協力で旧牧町集会所は、地元の人々の手によって真光寺境内に移築され、展示収蔵施設となります。こうして、収集された民具を展示する施設が出来上がり、同年秋に郷土史料館としてスタートしました。翌年正月には、名称を「田上郷土史料館」と改称し、正式にオープンします。

この史料館の強みは、地元に根ざした活動を徹底して進めてきたことです。人々の生活の中に生きていた道具類は、使っていた人でしかわからない面が多分にあります。その使い方、使用者の工夫やその道具にまつわる思い出。こうしたモノにまつわる物語を記録することで、収集した道具ははじめて意味を持つのです。田上郷土史料館は、早い時期から活動をはじめられたことで、道具を使っていた人々の話を聞き、それを記録化するとともに、その使い方を再現する試みを行っています。こうして地元だからこそできる貴重な記録が残されました。単に資料を収集するだけであれば、ここまでの成果をあげることは難しかったでしょうが、中心となった二人の好奇心と情熱、そしてそれをとりまく色々な人々の縁が、こうした活動を支え、大きな足跡を残すことになります。

史料館の活動として最初に取り組まれたのは、近代に廃絶した民俗芸能「太鼓踊り」の記録化でした。経験者を尋ねて歩き、古文書を探し、再現してもらうところまで漕ぎつけます。半世紀以上前に廃絶した芸能を再現するところまで持ってゆくのは並大抵の努力ではありませんが、その困難を乗り越えてゆきます。また、地域の年中行事を記録化することにも精力的に取り組み、失われた行事の再現による記録化も行っています。これらは、同館報1として昭和47年に発刊された『田上の民俗』にまとめられています。その後も『田上のあしあと』（昭和48年）、『田上の寺院』（昭和50年）、『田上集の郷』（昭和54年）と、次々とその成果を刊行されます。また、田村氏は、滋賀民俗学会の機関紙『民俗文化』にも、時々の調査成果を投稿され、田上の民俗を紹介しています。

田上郷土史料館全景（真光寺境内）

田村氏などが取り組んだテーマの一つに衣生活があります。かつての農村では、日常的な衣料を女性が手機で織り、仕立てることが普通でした。上田上地域でも同様でしたが、第二次世界大戦後は、安価な衣料が流通するようになり、家で機を織ることもなくなりました。そこで史料館では、手織り時代の着物や小物を精力的に収集し、その記憶を持つ古老に当時の話を聞き、再現も含めて記録化されました。同館には、かつて日常的に使われていた衣生活資料が膨大に収蔵され、そこには、田上てぬぐいや三巾前垂れなど、地域性豊かな生活文化が残されることになります。

談笑する女性たち（牧バス停にて）　昭和 48 年撮影

こうした貴重な資料に着目されたのが、龍谷大学国際文化学部で民俗学を担当されていた須藤護氏です。同大学の里山学研究センターの活動として、資料の重要性を共有する研究仲間とともに田上郷土史料館の資料整理に取り組み、現在も続けておられます。

本展では、こうした田上郷土史料館が収集された収蔵品の数々のうち、とくに衣生活資料を中心に様々な民具を展示し、同館が記録された貴重な写真等と共に、上田上のかつての生活文化を紹介しようとするものです。この展示を構成するにあたり、須藤氏が進めてこられた資料整理の成果にも大変助けられています。

大津市内にある民間の一資料館が地道に収集を積み重ねてこられた資料の数々から、少し前の人々の生活文化に触れていただければ幸いです。

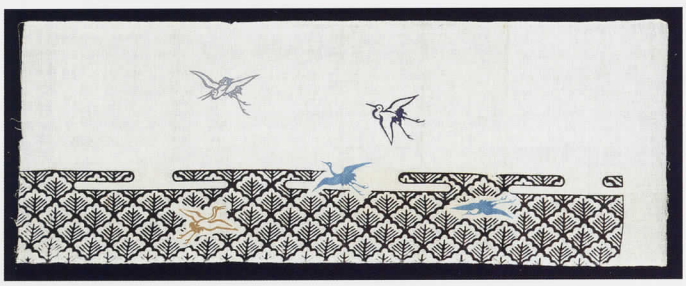
インフォメーション
会場：大津市歴史博物館企画展示室 A　　観覧料：常設展示観覧料でご覧いただけます。

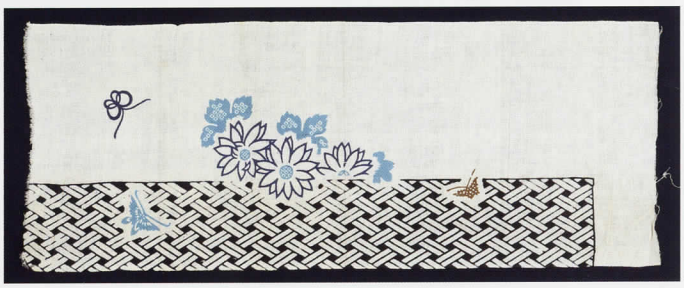
田上てぬぐい（テネン）

田上てぬぐいの図柄の特徴は、下３分の１ほどに、麻葉や七宝などの紋様があることです。かぶったときに図柄が前になる、かぶることを前提としたデザインです。女性たちはかぶり方も意識しています。年配の女性は額をすっぽりと覆うように、若い女性は少し前髪をみせるようになど、年代にあわせてかぶり方を変えました。もちろん風よけや日差し対策のための実用的なかぶり方もあります。また、あらたまった席に出るときには、新品に糊をつけたてぬぐいを身に着けました。

籬に撫子と沢蟹

麻葉に楓


菱柏に翔鶴


網代に菊と蝶

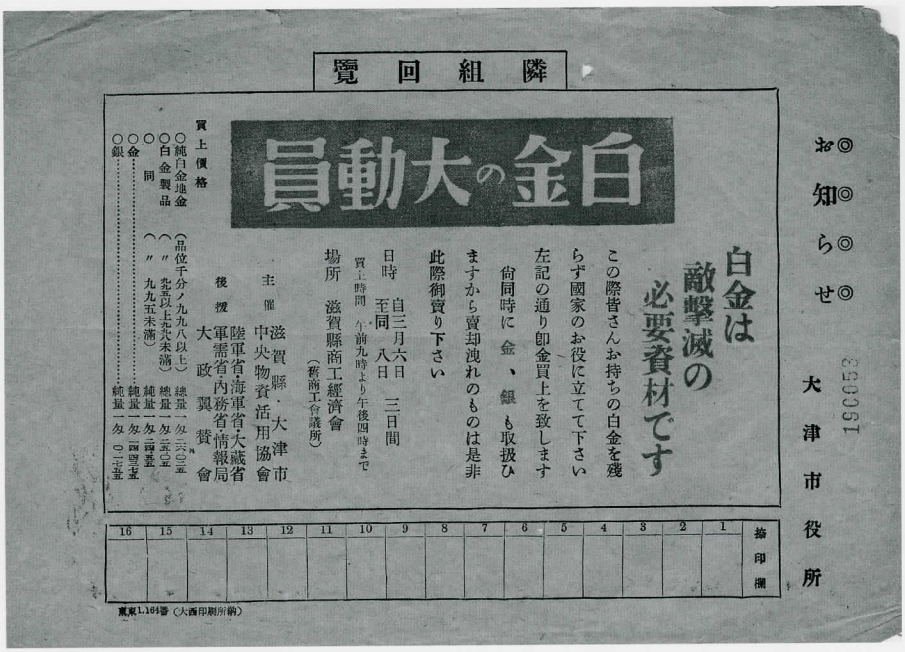
戦時中の町内会

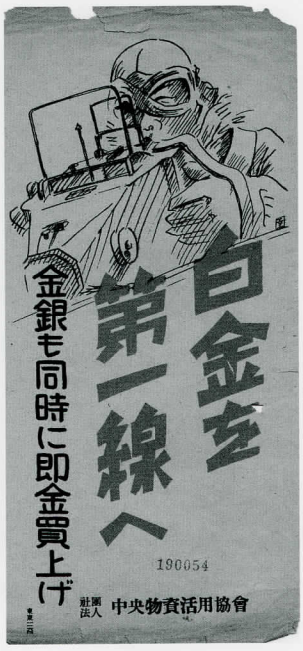
会期：8月1日（火）～ 9月3日（日）
【休館日：期間中の月曜日】

昭和12年（1937）7月、北京西南方の盧溝橋（ろこうきょう）で起きた日本軍と中国軍の衝突は、以後両国の全面戦争へと発展します。同15年10月には、戦争協力のための国民組織となる大政翼賛会（たいせいよくさんかい）が結成されます。そして翌16年正月、従来の町内会が、「聖戦」遂行のための下部組織として再編成され、皇国民としての修養や銃後の援護、国民貯蓄、経済統制など、戦争完遂に向けた多くの事業が、町内会に対して指示されるようになりました。

今回のミニ企画展では主に、戦時中から終戦後の進駐軍時代に及ぶ町内会に関する資料である、町内会長宛てに出された通達文（回覧板）などを展示します。これらの通達文は、粗悪な紙や反故紙（ほご し）を使ったガリ版刷のものがほとんどで、経年劣化が進んで読みにくくなっていますが、当時の大津市民が経験した戦時下の困難な生活実態をなまなましく今に伝えてくれる貴重な資料といえます。

展示では、たとえば、1．衣料切符や味噌・醤油・塩などの購入通帳配布に関する通達。2．武器製造材料となる金属類供出については、特にその特性から重視された白金（プラチナ）の供出を指示したもの。3．防空演習関係では、大津キネマ・新興キネマ・帝国館などにおける防空宣伝映画の案内や防空壕構築の注意事項、4．兵士の出征関係では、見送りの簡素化通達や、戦地で入手困難な小型日記帳を慰問袋に入れるように指示したもの。5．戦意高揚に向けた講演会の案内通知や天孫神社で執行される国難打開祈願祭への参加案内、6．占領軍の大津進駐に際する注意事項など、多岐に渡る資料を紹介します。これら資料の展示を通して、あらためて平和の大切さについて考える素材としていただければ幸いです。





白金供出を勧奨したチラシ

白金は硬度も高く、高温でも溶けにくく、しかも展延性（壊れずに延びる）に優れていることから、金属類供出のなかでも特に重視されました。写真のチラシはいずれも昭和19年に配布されたものです（個人蔵）。

学芸員のノートから

大津の都（近江大津宮）

近江大津宮は短命の都でした。667年3月、天智天皇（中大兄皇子）によって遷都されますが、671年12月には天皇が崩御、後継者争いである壬申の乱がおこり、672年7月には近江朝廷側の大友皇子（天智天皇の子）が、大海人皇子（天智天皇の弟）との戦に敗れます。この間、5年半程の期間に営まれたのが近江大津宮です。

平成27年度の企画展「大津歴博の玉手箱」では、「大津」に関わる様々な資料を展示しましたが、その際に、古代の国史である『日本書紀』において、「近江大津宮」と書かれている部分が「大津」の初登場と紹介しました。ここで改めて、宮の名称について書紀の記述を追うと、遷都については、天智天皇六年（667）三月十九日条に「都を近江に遷す」と出てきます。天智十年（671）十一月二十四日条に「近江宮に災けり」、同年十二月三日条に「天皇、近江宮に崩りましぬ」と記され、ここでは大津の名は見られません。また、壬申の乱に至る過程を記載した天武天皇元年（672）五月条には「近江京より倭京に至るまでに」と、大和の都に対応する形で「近江京」と書かれています。そして、持統天皇六年（692）閏五月十五日条で、天智天皇のことを表して「御近江大津宮天皇」と記されており、ここで天智天皇の宮を指して「近江大津宮」と言われていたことがわかります。

近江大津宮の所在地や構造については、江戸時代に寒川辰清による『近江輿地誌略』で取り上げられて以降、明治時代には、文献に記された崇福寺との位置関係や現地に残る地割や地名を元にして、宮の所在地論や条坊の有無を求めようとする研究が展開されました。昭和に入ると、考古学的な調査が始まり、昭和3年（1928）、同13年には崇福寺跡と南滋賀町廃寺の発掘調査がおこなわれ、白鳳期の古代寺院の構造や瓦が確認されました。そして、昭和49年（1974）以降、滋賀県教育委員会によって錦織周辺の発掘調査が進み、巨大な柱穴群の遺構が発見され、大津宮中枢部を成す内裏南門や内裏正殿の建物跡であると推定されました。現在、本館常設展示室にある大津宮の模型は、これら発掘調査成果を元に当時の姿を復元したものです。

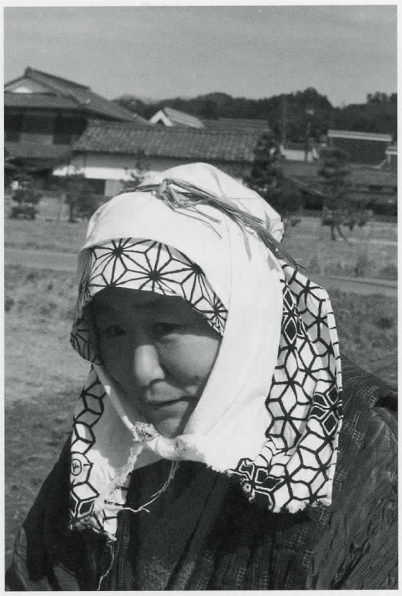
大津宮の時期に特徴的な遺物として、南滋賀町廃寺とその周辺で出土する方形瓦があります。特に、方形軒瓦は、通常の軒丸瓦と異なり、瓦当をほぼ正方形にして、蓮の花を側面から見た様子を文様としたもので、この地域だけで見られる珍しい瓦です。本年秋の企画展では、断片や採集資料なども合わせて、方形瓦をある程度まとまった形で紹介することを予定しており、採集資料の来歴なども現在調査中です。

（学芸員　福庭万里子）

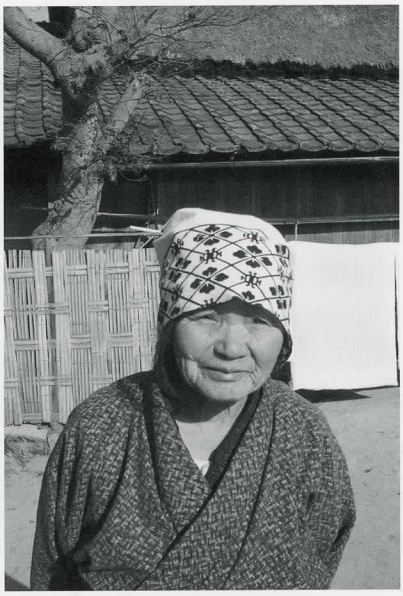
近江大津宮中枢部の復元模型（本館常設展示）

伝南滋賀町廃寺出土の方形軒瓦（本館常設展示）

田上てぬぐいのかぶり方



防風や防寒には2枚かぶることも



年配の女性のかぶり方

若い女性のかぶり方

三巾前垂れ（マエダリ）

布の織幅である、ひと幅を３枚並べてつなぎ合わせたのが三巾前垂れ。山仕事や田仕事の汚れを防ぐため、後ろですっぽりと腰に巻きつけて使いました。布は絣（かすり）や縞（しま）が用いられました。写真は絣ですが、年代によって身に着ける紋様が異なります。若い人は大柄なもの、年を経るごとに小さな柄を身に着けました。これらの布は、田上の女性たちが織ったものです。複雑な染の糸は購入したり染に出すことがありましたが、かつては村のほとんどの女性が、糸づくりから織までの方法を身につけていました。

三巾前垂れ

シロガスリ。写真は四つ柄（ひと幅に入る図柄が４つ）で、若い人向けの図柄です。帯の色も年代よって使い分けたそうです。

糸のべ　昭和 48 年撮影

綿から糸をつむぐ作業の再現。史料館には、収集された民俗資料とともに、膨大な調査カードや写真が整理・保存されています。

ご利用案内

■交通機関
- 京阪電鉄石山坂本線別所駅 徒歩5分
- JR 大津京駅 徒歩 15 分

■駐車場　約 70 台（無料）

■常設展示観覧料

区　分	個人	団体(15名以上)
一　　般	320 円	250 円
高校生・大学生	240 円	190 円
小学生・中学生	160 円	120 円

◆大津市内在住の 65 歳以上の方は一般料金の半額。
◆市内在住の障害者の方、市内在住の介護保険の要介護者の方・要支援者の方は無料（証明するものをご提示ください）。
◆ミニ企画展は、常設展観覧料でご覧いただけます。
◆企画展の観覧料については、その都度定めます。

■開館時間
午前９時～午後５時（展示室への入場は午後4時30分まで）

■休館日
月曜日（祝日・振替休日の場合は開館し、翌日が休館）
祝日の翌日（土・日曜日の場合は開館）
年末年始（12月27日～1月5日）館内点検（6月20日～21日）
その他、業務の都合により休館する場合があります。

歴博カードのご案内

当館主催の展覧会を自由にご観覧いただける定期観覧券です。また、当館発行の出版物や催し物の割引、様々な情報のご案内など、多くの特典を設けております。（1年間有効）

料金	一般	高大学	小中学
	2,000 円	1,500 円	1,000 円

★詳しくは博物館までお問い合わせ下さい。

OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY
大津市歴史博物館
〒520-0037 滋賀県大津市御陵町２番２号
TEL 077-521-2100　FAX 077-521-2666
http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/

大津歴博だより No.107　平成29年6月30日